

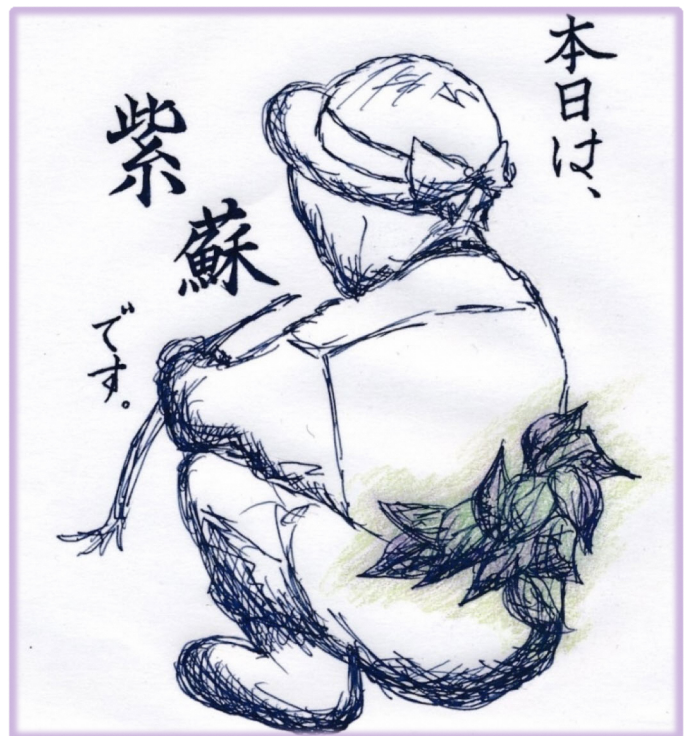
日付：8月11日（土） 天気：☔/☁

今日の当番☞ つむぎ

「岩之入入りした新月」

岩之入に来てから初めてお会いした方は、なんとも可愛らしいお婆ちゃん。“突然やって来た若いもん”である私達は、住民の方達がどのような反応をするのが不安でした。しかし、中川さんが笑顔で挨拶を返してくれたので緊張の糸がスッとほどけました。今もずっと心に残っているのが「お友達になりましょう」という言葉です。中川さんとお話しをしていると、人と関わるのが大好きなのがよく伝わってきます。私達へ対しても、前からご近所さんだったかのようにお話しを下さるから、とても親近感がわきます。

また、いつも畑で作業をされている働き者のお婆ちゃん、背中に何かしらをしょっていらっしゃるのが印象的でした。それを取ってこれから植えるのだろと予想しましたが、しばらく見ているとどうやらそうではないことが分かり、不思議に思いました。翌日も同じように背中に紫蘇の葉をしょっており、さすがに気になり尋ねてみたところ、日よけのために利用していることが分かりました。私達の目標は、中川さんとお友達を超えた親友になることです。



リボン付きの麦わら帽子が
とってもお似合いですね！



日付：8月12日（日） 天気：☀

今日の当番👉 つむぎ

「地域限定！岩之入お母さん”に出逢った日」

歓迎会の日の朝、一番初めに声をかけて下さったのが谷畑さんでした。障子の外からひょっこり顔を出して「みんな、よろしくね～！岩之入でのお母さんになってあげる。」と陽気な声で話かけて下さった時は、心がパッと明るくなりました。言葉の通り、困っていることや足りないものを尋ねると、「はいよー。」と袋いっぱいタオルを詰めて持ってきてくださったこともあり、タオルの分だけ愛情を感じられました。谷畑さんご一家は、移住されてきたということで農業専門ではありませんが、趣味でお野菜を育てられています。「朝採れたての新鮮なお野菜が、そのまま朝の食卓に並ぶことが何よりも幸せ。」と満面の笑みでお話して下さり、移住されてきたからこそ感じられる新鮮さなのではないか、と思いました。また、谷畑さんはお裁縫も好きで、お家には季節に合わせたお手製のカーテン（私が訪問した時期は夏ということで“ハワイアン柄”）が掛けられていました。自然界の景色を見て季節の移り変わりを感じるのも一つですが、一工夫を加えてお家の中で季節感を味わうというのは、楽しみが倍増しそうです。ご友人やお知り合いのお誕生日にはMADE IN IWANOIRI by 谷畑さんのハワイアンキルトをプレゼントするそうで、今回は私達向けにハワイアンキルトのレッスンを開催して下さいました。天候に左右される農業であったり、時間に追われるお仕事であったり、忙しい日常を送りながらも上手く自分の時間を見つけられることで、人生がより豊かなものになるだけではなく、良い切り替えにもなるだろうと思いました。その楽しみ方は人によって異なり、お酒を飲んで交流を深める人もいれば、外へお買い物をしにお出掛けする人もいます。私なら“思い出として形に残るものを、誰かの為に作る時間”としてあてるのが素敵だと思います。冬場の雪が多い時期でもお裁縫なら屋内で出来るので、お裁縫教室を開いたら好評になりそうです。次回訪ねた時には受講料が取られたりして(笑)

“キティちゃん博物館”ともいえるくらいのキティちゃんのぬいぐるみがずらりと並んだお部屋は、キティちゃん好きには必見です！

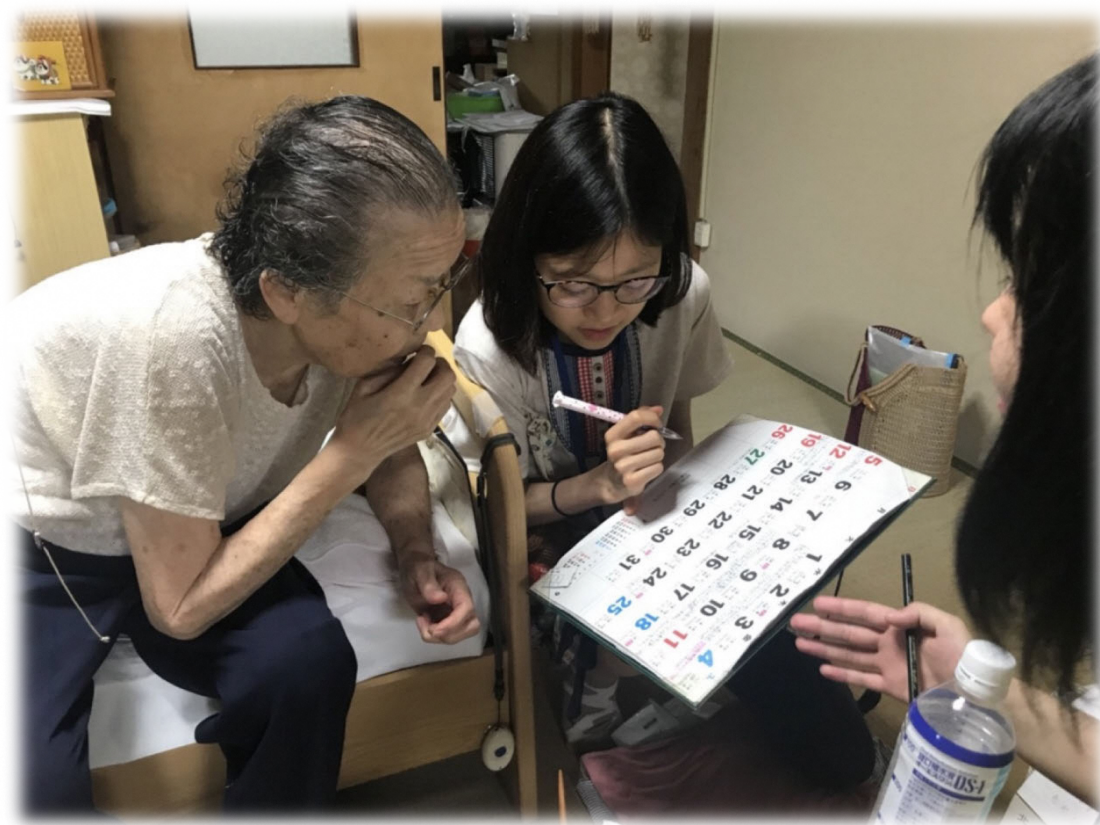


日付：8月13日（月） 天気：☀

今日の当番👤 はつね

「”あかり”があるのは人がいる象徴。こうして再び 灯りがともるのは嬉しい」

コンセプト生みの親である、お隣の中川さん。
かつては隣近所の女性陣で、作業後にお茶したり、何気ない話をしたり。そんな日常が幸せだった。今までは、夜になると、隣の明かりが灯ることが当たり前だったのに、お隣がいなくなりずっと寂しかった。そんな時、私たちが来たことで再び窓に灯りがともされた。「だから、あなたたちが来てくれてすごく嬉しいのよ」とおっしゃっていて、家の灯りは人の暖かみであり、豊かさの象徴になるんだと気づいた。



日付：8月14日（火） 天気：☀

今日の当番👁 はつね

「距離が縮まった帰り道」

町内三役の方々が塚山の花火大会に連れて行ってくださった。超穴場スポットで観られた私たちは、まるで独占しているような気分。ゆっくりしっとりと観る花火は初めてで、素敵な思い出となった。帰り道の車中で、長原さんが、「もっと甘えていいし、間違ったことがあったら指摘して欲しい。お互いに遠慮したり、緊張感で壁を作りたくないから、むしろもっと踏み込んで欲しい」とおっしゃっているのが印象的であった。その言葉を聞きながら、坂を下った花火の帰り道は、忘れられない思い出になった。



日付：8月15日（水） 天気：☀

今日の当番☞ みなほ

「親に感謝しねばダメなんだ」



会ってご挨拶をしてからしばらくすると、少し傾斜になった草むらで立ったまま、真剣にお話をしてくださった。背中を支えようとして手を添えて、とても驚いた。知らない骨の感触で、とても頑丈に、真っ直ぐと腰骨が突きだしていた。

顔は汗びっしょりになって、のどは振るえていて、日に焼けていて、大地みたいだと思った。一緒にかがんで見ていたけれど、自然と地面にしゃがんで、見上げるようにお顔を見ていた。90歳以上の命を支える身体と、これまでの人生や出会い、教え。とても見上げることしかできなかった。

「どんなに努力しても、どんなに学歴や資格を得ても、それは自分の力ではないんだ。いつだって、親がいるからなんだ。親が身体をくれて、育ててくれて、そうして自分があるんだって。親に感謝せねばダメなんだ。」

日付：8月17日（金） 天気：☀

今日の当番👁 はつね

「巣立つ前にね、家族 全員電線に止まって 最後に挨拶していく んだよ」

ツバメ界の大人気物件、司史さん宅の物置。今年だけでも4組も！ツバメの家族がそこから巣立っていきました。来年もにぎやかな夏になるといいなあ。



「モアイ像 in 岩之入」



コンクリートの障壁にくっついた、奇妙な形をした岩。インターン生三人はずっと不思議に思っていました。が、ついに2018年8月22日。ラッシュの飼い主である長原さんの証言により、真相が明らかになりました。上の道路を整備する際に元々生えていた木々を伐採していき、その木の根だけがどうしても撤去できなかったそう。それを何とかカバーしようとした結果が、モアイ岩之入になったのですね。

日付：8月17日（金） 天気：☀

今日の当番👉 みなほ

「世代を超えた、お友だち」

「変なの～タコみたーい」

しゃきしゃきのメロンを、つま楊枝でちくんと差して、口へ運ぶ。近所のお婆ちゃんの様子を見ていた青いワンピースの女の子。お婆ちゃんの目の前で、真っ直ぐな目で、躊躇いもせずに言う。それに対してお婆ちゃん、
「あら、可愛いクツねえ～」

家族で行って買ったというビーズのきらきらしたサンダルを履いて、女の子は、腰かけるお婆ちゃんの前で、すくっと立っていた。

8歳と90歳の穏やかな攻防。噛み合っているのかいないのか。横で眺めながら、少しずつ食べるメロンは、とっても甘い。車庫にそよぐ空色の風と、日射しの中を駆け回る、男の子のはしゃぐ声が心地良い。

身近に、「お爺ちゃん、お婆ちゃん」と呼べる存在がいること。血のつながりに関わらず、年の差も越えて、お友達になれること。地方や田舎だからこそなのだとしたら、なんて幸せなことだろう。



「暦ねえ。へえ、満月。でもすったらこと何にもねえよ。昔は餅つきも杵ですとんすとんついてたけど、今は全部機械だから。ぜーんぜん違うのよ。」

早くに旦那さんを亡くされて、女手一つで息子さんを育てた。日焼けして乾燥した薄い肌の腕を、恥ずかしそうに撫でながら笑っていた。

畑仕事も、棚田の段々となった大きな田んぼでの作業も、「男の仕事だけだね」という。それでも「ぜーんぶ作っていた」と、糸うり、バナナかぼちゃなどを見せてくださった。

集落にお世話になっている理由を、暦づくりのプロジェクト、と思わず説明したら。「ぶろせすと？」何度も一生懸命、口を動かされている。こちらも慌てて言葉を探す。長い時代を越えて、穏やかな日常を過ごされているおばあちゃんの姿が、とても可愛らしかった。

日付：8月19日（日） 天気：☀

今日の当番👉 つむぎ

「巨峰も流れた流し素麺会」

集落内で交流会があっても、若い方々が参加する機会は少ないのかもしれない。それなら、何か気軽に集まれるようなイベントを企画したい！と考えていて、8月19日にその思いが実現されたのが『流し〇△×会』です。“名前だけ知って



いてもどこの人か分からない”“挨拶程度で終わってしまう”などの声があり、あまり集まらないのでは?!と心配していましたが、予想していたよりも多くの方々に集まっていただきました。運営担当は不慣れでしたが、皆様のご協力のおかげで、何とか無事開催させることが出来ました。お父さんがお子さんよりも本気になって、流し枝

豆をお箸で取ろうとしている姿を見たり、一番賢い小学生の男の子が終点のざるの前でじっと構えていたり。面白い光景をたくさん見ることが出来ました。中でも印象に残ったのが眞鍋さんご夫婦。普段からノースリーブシャツを着て、外車を乗りこなす眞鍋さんに話しかけるのに、少しだけ緊張しました。しかし、趣味に関する質問をすると、“冬場は雪かきに追われてそれどころではない”という意見が多い中、それもそうだが楽しいこともあると言わんばかりに、ご自身の趣味についてお話してくださいました。スキーやスノーボードがお好きなようで、よく県内のスキー場に行かれるそうです。千葉に住む私の場合、雪質の良いスキー場まで行くことが遠いため、身近にアウトドアスポーツを楽しめることが羨ましいです。



その日は会の後も“灯”のイベントがあり、家を空けていて、夜暗くなってからお家へ戻ると、紙袋が郵便受けにかかっているではありませんか。そこにはお礼のお言葉と可愛らしい眞鍋さんのイラストが添えてありました。私達は感動して半泣きになり、蚊に刺されることなど気にもせず写真撮影会スタート。中には噂に聞いていた“ほんのび饅頭”が入っており、美味しくいただきました。数日後、たまたま眞鍋さんの運転する車が家の前を通ったので、私達はお礼を言おうと手を振ってみました。「美味しかったです！ありがとうございます!!」と伝えると、笑いながら「美味しかった～？ここら辺で有名なんだよ～。」との返答が。些細なことかもしれませんが、私達にとってはすごく嬉しい出来事でした。

日付：8月19日（日） 天気：☀

今日の当番👉 みなほ

「君たちがいたからこそできたんだよ」

日射しの下、まぶしそうに揺れる、色づいた稲穂。秋を待ち遠しそうに、緑と黄色が重なりあっている。

「ねえ、やってみないかな」

朝の草取りを見学させていただいたときのこと。岩之入集落のプロデューサーのような方からの、突然の提案だった。

雪景色のお祭りからやってきた、夏の田園にともす灯り。以前から提案の声は挙がっていたが、住民同士踏み切れずにいた。しかし、インターンの若者の存在が、皆さんの「やってみよう」のきっかけとなったという。



もう日の沈む、風が心地よい夏の夕方。棚田の上には、薄ぼんやりとした月が浮かんでいる。真っ白な筒と、彩り豊かな蝋燭。ひとつひとつ手にとって、棚田の周囲のゆるやかな坂道に、そっと並べていく。稲穂のそばには、既に並べられた何十個もの灯りがともっていた。

風の心地よい日暮れから、気づけば、月の灯りがくっきりと見える闇夜。虫の声と、数えきれないほどの、橙の灯り。私たちが力になれた

のは、この景観の中の、ほんの一部だった。

「やっぱりすごい。」「やってよかった」「これは来年のお盆にも」

夜風によって、あちこちから聞こえてくる。集落の方々の声から、感動や発見が伝わってきた。棚田オーナー制により、みなさんが力を合わせて、汗水を流して、四季を通して守ってきた景観だからこそ。そこにともされた灯りへの感動は、地域のみなさんの満ち足りたような表情、言葉、姿には、敵わないのだと思った。にぎやかな笑い声と、缶のぶつかる音。お酒もよく進んだようで、心配になった。

これからもしかしたら、冬の灯りと夏の灯りが、ここ岩之入の風物詩になれるのかもしれない。

＊冬の灯り → 雪景色に灯る、弘法様の108灯まつり

＊夏の灯り → お盆の時期、田園に揺れる橙色の灯り

日付：8月20日（月） 天気：☀

今日の当番👉 つむぎ

「じよんのび RUN ♪」

岩之入に来て初めての休日です。ご近所訪問をし、お婆ちゃん方とお話しをするのも仕事のうちですが、私にとってはそれが日々の楽しみでもあります。

しかし、せっかく丸々一日使える日なので、遠くまで出掛けることにしました。お天道様が顔を出すお昼ごろ、池田さんは大事なコキアとお車に水やりをなさっていました。たまたま通り掛かったお散歩中のはつねちゃんを見て、どこまで行くのかを尋ねました。そこで私が「じよんのびの里」まで走って行っていることを知りました。その日は最高気温が30度を上回る猛暑日で、心配をした池田さんは、お車で私の後を追って様子を見に来て下さいました。その様な事情を全く知らない私は、池田さんと偶然お会いできたことに喜び興奮してしまいました。下調べをあまりしなかったからか、距離感がつかめず、お言葉に甘えてそのままお車に乗せていただき、じよんのびの里へ行きました。ご心配をおかけしたこと、反省しております。

ふわふわとしたコキアを観ていると癒されます。鑑賞のみならず、簾としても活用できるそうです。稲の収穫が終わった10月頃に真っ赤なお花を咲かせるのが待ち遠しいです!!



日付：8月22日（水） 天気：☀

今日の当番☞ みなほ

「想いを継ぐこと、命や記憶を繋いでいくこと」



小豆色のベストのよう
な、柔らかな服を着
て、階段をするすると
上り降りされている。
おいつつですか、の後
に返ってきた答えに、
思わず後ろに倒れそ
うになった。薄い茶色
の肌も、穏やかな笑顔
も、すくっと伸びた背

中も、とてもとても、93歳には見えなかった。

初めてお会いしたときの柔らかさのまま、ちゃきちゃきと出されたお料理たち。その中には、まるで小豆のような色をした、でも粒がもう少しふっくらと大きい、「いんげんとささげの甘煮」がある。

「今幸せだよ。」「昔は苦労したんだよ」3人に代わる代わるお茶を注ぐ手の合間、13才のころの記憶のお話。「いつでも空襲警報」「生きている心地なんてなかったよ」厳しいようなかたい表情。朝の4時半から始まる集団生活。人手不足で、病気や障害に関わらず届く赤札。

「今はこんな話する人もなかなかいねだろう。教育できくからって、それは昔と今ではぜんぜん違う。経験していねだろう。」じっと真っ直ぐ目を見つめながら、堂々と話す力強さ。

座ってらっしゃる畳のいすの後ろから、背中越しに、黄金色の光がみえる。しんと佇む仏壇も、壁に掛けられたご家族やご先祖さまの写真も、女性の方の想いを支えてくださっているのかもしれない。血を継ぐこと、想いを継ぐこと、命や記憶を繋いでいくこと。その時代を生きたという証であり、そっと力強く手渡せるバトンでもあること。

「苦労しねえとダメだ」「人間ができてくる」「人の気持ちもわかるようになる。」

口の中の甘さも、何度も注いでもくださったお茶も、いつの間にか、味わいが変わっていた。お宅にいる間、ずっと何かしら動いては、「遠慮すんな」ってお世話をしてくださった。何十年と旦那様の介護をされてきた手や心が、どこまでも優しく、ほっとする時間であった。

日付：8月23日（木） 天気：☀

今日の当番👉 みなほ

「自然の力を借りて育てているんだよ」



ブルーシートを乗せたトラックが、朝露に濡れている。朝焼けに染まる土の上に立ったなら、ほんの少しの眠たさも、流れる風に吹き飛んでしまうような、爽快な朝の始まり。

池田さんの畑には、メロン、スイカ、きゅうり、オクラ、なす。家庭のためだけではなく、農協さんへ出荷する野菜も育てている大

きな畑。手前のみねから奥に進むほど、少しずつ朝日がさしてきた。ぴかぴかと照らされたお野菜は、見たことのない緑色。みんな起きたばかりで、エネルギーに満ちていた。

いつもは、朝4時半に起きて、5時半から8時頃まで、一人でこの畑のお世話をする。一番大変な水やりは、週に三回ほど。雨の少ない今年の暑さは、植物にとっても辛かったのかな。足元はダックワーズみたいで、白い土は歩くたびに、ほろほろと崩れた。



「人間の子どもと同じだよ。全部を親が世話することはできない。成長するほど、ある程度は、自分の力でやってもらうしかない。」

子どもと同じように、たくさんの愛情と精魂をこめて、見守り育てる。だけど、握るとしっかりと重い実も、日を浴びようと重ならず広がる葉も、誰の手も借りずに染まる紫や淡いみどりも、どれをとっても、自然の力は偉大だった。えらいなあ、いい子だね～って、収穫用のハサミも忘れて、軍手越しに撫でてしまうくらいである。

山に囲まれた、畑を出てすぐの草っ原に広く伸びる陰で、奥さん手作りの朝ごはんを食べた。まるで遠足かピクニックの気持ちで、おにぎりや卵焼きを頬張る。

「普段は気付かないし、見ないふりをする事だってある。だからこそ、外の人からの視点は新鮮で、こちらも教えてもらうことがたくさんあるんだよね」

何かに依存したり、寄りかかったりするわけではない。それでも、全く一人の力で、今が立っているわけでもない。畑のご主人の穏やかで芯のある人柄が、贅沢な朝の時間に、いっぱい安心感をくださった。

「ぜいたくだなあ～」最近の口ぐせになりつつある。新潟のお米もお野菜も、岩之入の思い入れのある自然も。毎日わくわく待っているピンポンもないなんて、果たしてもとの生活に戻れるのだろうか・・・



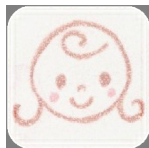
日付：8月23日（木） 天気：☔/☁

今日の当番☞ つむぎ

「美味しいお漬物達と良い湯に浸かりたい私達」

何やかんやで忙しい日々が続き、久しぶりにお風呂に入ってまったりしたくなりました。隣まちにある“広田鉦泉湯元館”の評判を聞いたことがあったので、どうしても行きたくなり、オーナーの知人である中川さんをお願いをしました。本当に突然だったのにも関わらず、快く招いて下さり、良い湯の後に良いお話しまでお聞きすることが出来ました。

中川さんはご自身で電気屋さんを営まれており、地域密着型ならではの利点をお話しして下さいました。お客様のことを一番に思い、かつ言ったことにはきちんと責任を持つという彼の強い理念に心を打たれました。お話を聞いていると、体一つでは足りないくらい熱心に働いていらっしゃるがよく伝わってきました。見た目は、スキニージーンズを履いてサングラスをかけた、ちょいワル系の方に見えますが、実はものすごい努力をされている方でした。これぞ正に“プロフェッショナル仕事の流儀”を見させていただいた気分です。



二槽式洗濯機の使い方を分かりやすく教えていただき、ありがとうございました！



日付：8月27日（月） 天気：☔/☁

今日の当番☞ みなほ

「かけていく背中、手を振る夏の日」

もうすぐ日暮れどき、いつものようにピンポーンがきこえて、はい！と玄関の前へ。がらがらと開くと、小さな緑色の筒がある。んっ？と顔を上げると、そこには、背がすらっと伸びて日に焼けた男の子がいた。「これ、どうぞ」短いけれど、強さのある声だった。

一緒に遊んでくれたお礼にとって手渡されたお菓子を受け取ると、

「ついてきて！」

自転車にまたがる男の子の先導で、岩之入プチ探検ツアーが決行された。

「北条には小学校が一つしかないから」

つぶやくような声をのこして、長鳥駅の坂道



をぐんぐん登っていく。この子の見ていた景色は、ここだったんだ。線路沿いには、集落の方に教えていただいた、子どもの頃の遊びができる葉っぱがあった。筒のように丸めた手に乗せて、上からもう片手で、パンッと叩いて音を鳴らす。かっこよくやってみせようってやってみるけれど、全然上手く音が鳴らない。うーん、と試行錯誤している私たちに、さらっと教えてくれた。

「これ、違う葉っぱだよ。」 花火のとき同様、やっぱり物知りな男の子だった。

森の中をぐんぐんと進んでゆく。男の子とインターン生の女の子は、「よし、走るぞ！」と息ぴったり。まるでわんぱくな小学生みたいだなあと眺めながら、私も、えっほえっほと進む。集落で唯一の小学生。こんな風は無邪気に、すっかり大きなお兄ちゃんの声で、一緒に思いっきり遊べる子どもが、この集落にも増えていったらいいな。街よりずっと、自由奔放な遊びの可能性は無限大にみえた。

「おーい、どこ行ってきたのー」

帰り道の途中、お会いした集落の方からの何気ない問いかけに、元気いっぱい返事をする。その姿が見られただけで、「そうか、そうか」と男性は、胸いっぱいな表情だった。子どもの成長をいつでも見守っている。集落の方々にとっても、いろんなきっかけになれているのかな。

「また遊ぼうね」手を振って、カッコいい自転車を見送りながら思い出す。探検の帰り道、全速力で家までかけていく背中からきこえてきた言葉。

「あの人走るのおそい〜」 私が遅いのは、事実だから仕方ないけれど…名前だけはなんとしても覚えてもらおうぞ！と意気込んだ。気づけば、夕飯どきだった。